

キム イクチョン 金 益重 教授 韓国東国大医学部教授 韓国反核医師の会運営委員

「基準値以下の放射性物質は安全ですか？」

「答えは、いいえ」ちゃんと医学の教科書に書いてある。『放射線によって発症するのは、甲状腺がん、乳がん、白血病、心筋梗塞、遺伝性疾患、腎臓炎、中枢神経系腫瘍、白内障など』「基準値以下の食品は安全ですか？」「答えは、いいえ」この数値に医学的根拠はなく、基準値が高いと国民の被ばく量が増加するので、達成可能な最小値にすべきである。日本では、10~20^μル/ Kgが適切と思われる。現状の100^μル/ Kgは高すぎる基準値であり、セシウムしか問題にしていけない。セシウムは放出された約100種類の放射性物質の放出量全体の0.1%にしか過ぎない。被ばく量は、飲食、呼吸、外部被ばくの合計を計算しなければならない。

韓国政府による20年間にわたる疫学調査から、通常運転の原発5km圏内で、女性の甲状腺がんが通常の2.5倍発症していることが明らかになり、それを根拠に裁判所が原発会社に賠償責任を認める判決を出した。日本は、国民の被ばく量を計算し、がんだけでなく数多くの疾病の統計をだし、東京電力に責任を取らせるべきだ。世界の原発数は、25年間ほとんど変化せず最近減り始めた。先進国は原発から撤退し始めている。日本も原発をやめるべきである。

崎山 比早子 医師 高木学校 国会事故調査委員会委員

1950年代、ロシアのマヤーク核施設からの核廃棄物を住民に知らせずテチャ川に廃棄していた。そのテチャ川流域住民の疫学調査によると、慢性放射線障害や白血球、血小板の減少、免疫力の低下によるいろいろな症状がみられた。同じ線量でも低年齢のほうが症状が重く長期化した。

チェルノブイリでは、特に甲状腺炎が増加した。骨髄、リンパ節等に対する影響により急性疾患、慢性疾患、感染症が増加した。テチャ川流域は、その後居住禁止となり、「その車の最高速度で走れ」という看板が立つほどひどく汚染された。このことは笑い話ではなく、先日開通した国道6号線は、場所によってはもっとひどい汚染かも知れない。そこを約1万台の車が、毎日走行していることは本当に深刻な問題であり、被ばく問題を無視していると将来、福島だけでなく日本全体にどんな健康影響が起きてくるのかとても心配している。

我慢し続けるのは、自分の健康だけでなく子孫にも影響がでる。自分たちで社会を変えることで避難も簡単になるだろうし、それが子孫への責任の取り方だと思ふ。

山田 真 医師 子どもたちを放射能から守る全国小児科医ネットワーク

今日福島駅から、少し歩いたら線量計が0.67マイクロベクレルを計測した。この線量は、チェルノブイリでは移住の義務地域。全国各地へ避難している福島県民から、「福島へ帰って良いか」と質問されるが、現状では住んではいけない所と感じている。

小児科医として、森永ヒ素ミルク中毒患者や水俣有機水銀中毒患者に関わってきた。その救援体制から見ると、福島の放射能障害には未だ何もできていない。水俣でも森永でも「国がやる検診は、その結果を彼らに都合のいいように読み、解釈をする。」ということを見てきた。国に任せず自分たちで検診を実施し事実を把握しなければならない。

甲状腺がんは、1990年代半ばから増えているがんである。チェルノブイリ原発事故と医療被ばくの影響と考えられている。現在、世界的に甲状腺がん多発という状況であり、事故のあった日本の国民の調査をしないのは全くおかしい。国は、事故の被害を隠すために検査の年齢や地域を限定し、放射線との因果関係の証明や許容量の議論に終始し時間稼ぎをしている。正確な情報や、生のデータを開示させ、国や東電にその責任を取らせなければならない。

また、学校などで行われている放射能安全キャンペーンに対して怒りを持って抗議するべきだ。

参加者の感想等 (アンケートより)

- ・布施先生、是非被ばく手帳をお願いします。「避難、保養、医療」今後ともよろしくお願いします。(女性)
- ・特にキム氏のお話はとてもわかりやすく、日本医師会の隠ぺいと無知にはあきれてしまいます。脱原発は重要だとさらに思いました。(女性)
- ・やや極論が多く、医療不信という形で本質がぶれてしまう可能性を感じます。今大切なことは対立や攻撃ではなく、ともに協力、改善のほうです。(女性)
- ・パネラーの話は分かりやすいものが多くよかったです。是非回数を重ねてください。(男性)
- ・来年もずっと続けてほしい、福島在住の声、意見をとりあげて。(男性)
- ・福島にいと何事もなかったように日常生活が営まれています。心のどこかで「本当はどうなんだろう？」という不安は消えません。”放射能は0に限りなく近いほうが良い” 分かり切ったことなのになぜ主張できないのか？本当に不思議です。家庭の事情により避難することができませんが、今日聞いたお話を忘れないようにしたいと思います(女性)



福島原発事故にがんするUNSCEAR (原子放射線の影響に関する国連科学委員会) 報告についてお話しします。

有名な国連機関ですから、中立的で信頼できる科学的な委員会であってほしいのですが、2014年4月の「福島報告」では、原子力産業に近い情報源からのデータを使用しています。(放出された放射線量や汚染された食料や水による内部被ばく量、原発労働者の被ばく線量など)

がん以外の病気、循環器疾患なども、体内に摂取された放射能によってリスクが高まります。それは、この10年間に研究、出版された、広島や長崎の被爆者や原発労働者のデータで明らかにされました。

少なくとも、約千人が甲状腺がんになるでしょう。すでに福島県の子供たちに100人以上の甲状腺がんが発生しています。原発事故の放射能により、実際どれだけ引き起こされたかはわかりません。

今わかっていることは、それだけの数の甲状腺がんが発見されているということです。甲状腺の研究を始めてから、予想してきた数に比べると信じられない高い率です。

この報告は、次の10年間に福島で起こりうる事態を意図的に過小評価しているのです。福島の人びとは、自分たちが自己決定できる適切なデータを必要としています。最も大事なことは、すべての人が健康になる権利をもち、健全な環境の中で生活する権利をもっているということです。これは私たちが医師として確信していることです。

そしてこれこそ、福島の人びとがいま奪われているものなのです。

I P P N W (核戦争防止国際医師会議)
ドイツ支部会長代行
アレックス・ローゼン (小児科医)

ひさくによる
見えて 歩き 福島デスティネーションの先にあるもの
帰還 再稼働 オリンピック...

今年も福島では見事な桜が咲きました。3.11後も美しく咲く福島の桜。

4/1~6/28まで福島県、観光業者、JRが大々的に行っている「福島デスティネーションキャンペーン」の見所は、まさに桜です。

その一方で、かき消されている福島の風景。「黒いピラミッド」と呼ばれる除染物が入ったフレコンバグの山。街中で目にする「除染作業中」の看板...

華やかなキャンペーンの裏で原発事故後4年たっても深刻化する福島の現実があるのです。

地元紙には2020年東京オリンピックキャンプ誘致を報じる「『原発事故のフクシマ』のイメージを覆し」とありました(4/18福島民友)。原発直下の楢葉町や広野町もサッカーキャンプ誘致に名乗りをあげています。「帰りたいくない、帰れない」住民がいる中でキャンプ誘致など、許されない話です(怒)

復興キャンペーンの先にあるのは、県民を犠牲にした帰還、再稼働、オリンピックではないでしょうか。



お母さんの
アンテナ



本格検査で、あらたに「がんおよび疑い」と診断された8人のお子さんたちが、いずれも**先行検査ではA判定**だったことが気になります。うちの子もA1判定でホッとしたことを今もおぼえています。なるべく早くもう一度検査してもらいたいと思います。親たちのこんな不安な思いは「原発事故の影響と考えられない」といくら言われても消せません。

<県民健康調査二次検査結果> (2015 2/12発表)

	先行検査結果	本格検査結果
甲状腺がんおよび疑いの子ども	118人	118人
甲状腺がんおよび疑い	110人 ※良性1人	8人 先行検査ではA判定(異常なし) (A1: 5人 A2: 3人)
手術を受けた子ども	87人 ※がん確定86人、良性1人	1人
年齢(震災当時)	6歳~18歳	6歳~17歳
性別	男性38人:女性72人	男性4人:女性4人
腫瘍径	5.1mm~40.5mm	6.0mm~17.3mm